

現代倫理道德研究会（平成 30 年 2 月 20 日）発表要旨

認知症患者の生活の質（QOL）を測る方法と問題点について

生命環境研究室

客員教授 小山高正

2025 年には日本の高齢化率は 30%を超え、5 人に 1 人が認知症になるという予測がある。認知症が本人、家族、そして社会にもたらす問題を理解し、認知症患者をどのように支援していけば良いのかは喫緊の課題である。認知機能に障害が生じ、日常生活に差し障りがでてきてしまった人たちに対して、それまでの人生に見合う生活の質（QOL）が得られるよう支援するための介入方法はいくつか考えられる。いずれの介入法を取るにしても、介入によって QOL が改善されたかどうかの見極めが大なり小なり必要となるであろう。QOL をどう測るのかの問題を、すでに使われている各種健康関連 QOL、大阪大学が開発した日常会話式認知機能評価尺度 CANDY、また OECD が開発した主観的幸福尺度などを参考に検討したい。ここでは、①本人ではなく観察者が日常の観察から評価できる、②評価項目を 10～15 程度にする、③具体的な行動から評価が可能なルーブリック形式、というような簡便評価尺度の開発を目指している。